

学位論文要旨

我が国における潮湯治から海水浴への変化過程に関する歴史的研究

國 木 孝 治

I 論文題目

我が国における潮湯治から海水浴への変化過程に関する歴史的研究

II 目次

序章

- 第1節 本研究の目的と意義
 - 第1項 本研究の目的
 - 第2項 本研究の意義
 - 第2節 先行研究の検討
 - 第3節 本研究の課題と論文の構成
 - 第1項 本研究の対象
 - 第2項 本研究の構成と課題
 - 第4節 本研究の資料
- 註

第1章 平安時代から明治時代初期における大野の潮湯治と潮湯治場

- はじめに
- 第1節 平安時代の湯あみ
 - 第2節 鎌倉・室町時代の湯あみ
 - 第3節 江戸時代初期の潮湯治と潮湯治場
 - 第4節 江戸時代中期の潮湯治と潮湯治場
 - 第1項 『平野家実記』『徳川家記』にみられる潮湯治と潮湯治場
 - 第2項 『木綿苑家集』にみられる潮湯治と潮湯治場
 - 第3項 『安永本邦萬姓司記』にみられる潮湯治と潮湯治場
 - 第5節 江戸時代後期の潮湯治と潮湯治場
 - 第1項 『尾張名所図会』にみられる潮湯治と潮湯治場
 - 第2項 『郷中知多栗毛』にみられる潮湯治と潮湯治場
 - 第6節 明治時代初期における潮湯治から海水浴、潮湯治場から海水浴場への変遷
 - 第1項 1881（明治14）年から1882（明治15）年の海水浴場の開設
 - 第2項 寺田寅彦の1881（明治14）年の潮湯治体験
 - 第3項 1882（明治15）年に描かれた潮湯治場
- 註

第2章 江戸時代後期から明治時代初期における海水浴の伝播

— 西洋医学書および医学教育の内容にみられる海水浴 —

- はじめに
- 第1節 来日外国人医師・シーボルトによって行われた医学教育にみられる海水浴
 - 第1項 『失勃児杜験方録』『失勃児督処方録』の概要と経緯
 - 第2項 『失勃児杜験方録』『失勃児督処方録』にみられる海水浴
 - 第2節 輸入医学書および翻訳書の内容にみられる海水浴
 - 第1項 『窠篤児薬性論』
 - 1) 『窠篤児薬性論』の概要
 - 2) 『窠篤児薬性論』刊行の経緯
 - 3) 『窠篤児薬性論』にみられる海水浴

第2項 『扶氏経験遺訓』

- 1) 『扶氏経験遺訓』の概要
- 2) 『扶氏経験遺訓』刊行の経緯
- 3) 『扶氏経験遺訓』にみられる海水浴

第3節 来日外国人医師・ポンペによって行われた医学教育にみられる海水浴

- 第1項 病気診断の処方箋にみられる海水浴
- 第2項 ポンペと松本良順の会話の内容にみられる海水浴

註

第3章 江戸時代後期から明治時代初期における海水浴の伝播

— 来日外国人による海水浴 —

はじめに

第1節 江戸時代後期（-1868）における来日外国人による海水浴

第2節 明治時代初期（1868-1877）における来日外国人による海水浴

- 第1項 ロングフェローによる1871年（明治4年）の海水浴
- 第2項 ヒューブナーの記録にみられる1871（明治4）年の海水浴
- 第3項 ブスケによる1872（明治5）年の海水浴
- 第4項 ギメとレガメーによる1876（明治9）年の海水浴
- 第5項 モース、外山、松村による1877（明治10）年の海水浴

第3節 明治時代初期（1878-1887）における海水浴と海水浴場

- 第1項 ベルツによる1879（明治12）年の調査と1880（明治13）年の海水浴
- 第2項 アーネスト・サトウによる1881（明治14）年の海水浴地の紹介
- 第3項 柳田国男がみた1887（明治20）年の海水浴

註

第4章 明治時代初期の海水浴論

はじめに

- 第1節 緒方惟準・村瀬讓「海水浴」「海水浴説」緒方惟準「海水浴ノ説」
- 第2節 内務省衛生局「海水浴説」
- 第3節 後藤新平『海水功用論 附海浜療法』
- 第4節 栗本東明「日本海水浴説」
- 第5節 高木兼寛「浴法論」
- 第6節 松本順『海水浴法概説』

註

終章

第1節 本研究のまとめ

- 第1項 江戸時代後期から明治時代初期における海水浴概念の伝播
— 西洋医学書および医学教育の内容にみられる海水浴 —
- 第2項 江戸時代後期から明治時代初期における海水浴の伝播
— 来日外国人による海水浴 —
- 第3項 明治時代初期の海水浴論

- 第4項 我が国における潮湯治から海水浴への変化過程

第2節 今後の課題

引用・参考文献

資料

III 論文要旨

序 章

第1節 本研究の目的と意義

本研究は、大野（愛知県常滑市大野町）を事例として、我が国における潮湯治から海水浴への変化過程を明らかにすることを目的としている。

海水浴は、我が国における海洋性レジャー活動の中で最も多くの人々が参加している活動であり、現代の夏のレジャーとして広く国民に受容されている。その歴史を紐解くと、海水浴は病気治療や療養を目的として、江戸時代後期から明治時代初期にかけて西欧から伝播、導入されたことが諸説（杉本、2007；瀬崎、2007；國木、2012）より導き出される。しかし、海水浴という概念を如実に反映させたような行為や場が、突如として出現したとは考えにくい。したがって、西洋の医学的認識を介して伝播された海水浴や、来日外国人によって伝播された海水浴と、潮湯治のような類似的行動様式との関係を検討する必要がある。しかし、潮湯治と海水浴の伝播との関係を解き明かした先行研究はない。

本研究によって、潮湯治と潮湯治場の発祥と発展、および海水浴伝播期の実態を解明することにより、我が国における海水浴史の一端を明らかにすることにつながると考えられる。

第2節 先行研究の検討

海水浴の概念が伝播する以前から我が国に存在していた、蒸気浴・熱気浴に関する研究としては、小口（1988、1992）による一連の研究が挙げられる。このほか、潮湯に関する研究として、小口（1986）による潮湯の遍在性に関する研究、新藤（2008）による潮湯治等入浴文化に関する研究が挙げられる。小口、新藤による各研究は、我が国における海水浴の普及との関連性も含めて考察されており、直接海水に身を浸す潮湯治についても断片的に取り上げている。

潮湯、潮湯治、潮湯治場、海水浴、海水浴場等に関連する名称の、初出資料の整理に重点が置かれた研究としては、上田（2006）による研究が挙げられる。資料発掘量は豊富であり、これらの資料を基に日本における海水浴の起源諸説の評価を行っている。しかし、複数地域の事象を列記し整理・考察したものであり、潮湯治と潮湯治場、及び海水浴と海水浴場の発祥、発展、変化に至る過程の解明を試みたものでない。

明治時代初期から中期にかけての、海水浴と海水浴場の発展に関する研究としては、小口（1985、1998、2002、2007）による歴史地理学の視点から取り組まれた一連の研究が挙げられる。小口による一連の研究は、明治10年代から20年代における海水浴と海水浴場の大要を掴むことができ、且つ先史より各地で行われていた潮湯治についても触れている点で、包括的な海水浴史としても参考とされる。しかし、主に明治14年以降に論じられた諸説、図書等の整理を中心に、複数地域の事象を列記し整理・考察したものであり、海水浴という概念が、いつ、どのような形態で伝播したのかについては言及されておらず、先史から海水浴に至る変化の解明には至っていない。このほか、中山（2001）による研究が挙げられる。中山による研究は主に、明治10年代以降に開設される東京・大磯間の海水浴場の成立とその背景分析を試みたものである。

都道府県ごとの実態解明を試みた研究としては、岡山県に関する上田（2007）による研究、新潟県に関する十代田・岡村（1995）による研究、富山県に関する富澤・若林（2006）による研究、島根県に関する森口（1994）による研究が挙げられる。さらに地域を限定した研究としては、浜寺（大阪府）海水浴場経営に着目した綿貫（2004）による研究、巖島（広島県）の海水浴に関する國木（2011）による研究が挙げられる。しかし、いずれも明治時代中期以降を対象としており、潮湯治から海水浴へ、および潮湯治場から海水浴場への変化の過程と、海水浴概念伝播後におけるその後の海水浴と海水浴場の普及、発展の解明のためには、国内でいち早く

海水浴を受容した事例や、潮湯治から海水浴へ、及び潮湯治場から海水浴場への変遷をたどった地域事例を取り上げ、究明する必要があると考えられる。

明治時代になって論じられた海水浴と海水浴場に関する刊行本や論説を対象とした研究としては、宗田（1993）による緒方惟準『海水浴説』の翻刻、上田（2009）による緒方惟準『海水浴ノ説』の翻刻、小口（1985）による「内務省衛生局『海水浴説』、後藤新平『海水功用論 附海浜療法』、松本順『海水浴法概説』』を取り上げた研究が挙げられる。いずれの研究も各論説や図書の内容を紹介したものであるが、この年代期に論じられた全ての諸説を取り上げ検討したものではない。

江戸時代後期から明治時代における包括的な海水浴史として、畔柳（2010）による図書が挙げられる。しかし、今日までに解明されてきた史実間の未だ解明されていない部分について、フィクションで統合されている点がみうけられ、課題とされる。

このように、明治時代以前の日本において普及していた〈潮湯治〉と呼ばれていた行動様式について、歴史地理学の分野において断片的に取り上げられてはいるが、直接焦点を当てた歴史的研究は未だない。また、江戸時代後期から明治時代初期にかけて使われ始める〈海水浴〉の用語や行動様式について、どのような経緯で伝播したのかということに焦点を当てた歴史的研究は未だない。

第3節 本研究の課題と論文の構成

第1項 本研究の対象

本研究が対象とする時代は、原則、江戸時代後期から明治時代初期までである。なお、我が国における潮湯治と潮湯治場の歴史の全体像を把握し、海水浴の概念が伝播してくるまでの歴史を明らかにするため、一部平安時代から明治時代初期までを対象とした。

第2項 本研究の構成と課題

本研究は4つの章から構成されている。

第1章「平安時代から明治時代初期における大野の潮湯治と潮湯治場」では、大野（愛知県常滑市大野町）の潮湯治と潮湯治場を事例として取り上げ、潮湯治と潮湯治場の歴史の全体像を把握し、大野に海水浴の概念が伝播してくるまでの歴史を明らかにする。

第2章「江戸時代後期から明治時代初期における海水浴の伝播—西洋医学書および医学教育の内容にみられる海水浴—」では、来日外国人医師によって行われた医学教育の講義記録とその内容、および輸入医学書とその翻訳書の内容に着目し、海水浴の名称または類似する文面がみられる最古の資料を発掘し、西洋からの医学的知識を介することによって我が国に持ち込まれた海水浴概念の内容を明らかにする。

第3章「江戸時代後期から明治時代初期における海水浴の伝播—来日外国人による海水浴—」では、この時代の社会的な背景を概観したうえで、幕末期から明治時代にかけて来日した、いわゆるお雇い外国人と呼ばれた来日外国人らの日記や回顧録を頼りに、海水に浴したり海で泳いだりした記録を取り上げ、その内容を明らかにする。

第4章「明治時代初期の海水浴論」では、明治時代初期に発表、刊行された海水浴の効用を説いた論説や、海水浴と海水浴場に関する解説書を取り上げる。ここでは先行研究で既に論じられた内容を踏まえたうえで、1887（明治20）年までに発表、刊行された、現在入手し得る全ての海水浴と海水浴場に関する資料を対象とし、発表、刊行に至る経緯、目的、内容について新たな知見を加え、医者や為政者が捉えていた海水浴概念の内容を明らかにする。

第4節 本研究の資料

第1章で取り扱う資料は、第1に、大野の潮湯治と潮湯治に関する和歌、古文書、地誌、文芸書、市町村史、観光案内等を使用する。なおここには、個人所蔵も含め、可能な限り収集できたもの、および各資料分析がなされた研究資料も含まれる。第2に、大野の海水浴と海水浴場に関する図書、雑誌、絵図、文芸書、随筆、日記類を使用する。なおここには、海水浴法や海水浴場の選定について解説された図書や雑誌も含まれる。

第2章で取り扱う資料は、第1に、日本人によって聞き取り書きされたシーボルト講義録である。管見の限り、来日外国人医師によって行われた医学教育の講義記録のなかで、海水浴についての記載がみられた、現存する江戸時代後期の資料としては最古のものと考えられる。ここでは、全文の翻刻がされている中村(1990)による「蘭方口伝—シーボルト験方録」にある『失勃児杜験方録』、および戸塚(1983)による『シーボルト処方録』にある『失勃児督処方録』の2資料を使用した。第2に、輸入医学書とその翻訳書で、我が国に輸入された外国医学書の原書、およびその翻訳書のなかで、海水浴についての記載がみられた『窓篤児薬性論』と、『扶氏経験遺訓』の2書である。加えて、各資料の著者・訳者について知ることのできる懐古録、伝記、および日本語の訳出に使用されたと考えられる蘭和辞書を資料の対象とした。第3に、ポンペによって伝えられた海水浴について知ることのできる日記、回顧録と、九州大学図書館に所蔵されているポンペの書簡、及びその書簡の翻訳文である。加えて、それら主資料の著者・訳者について知ることのできる図書も資料の対象とした。

第3章で取り扱う資料は、第1に、江戸時代後期から明治時代初期にかけて来日した現在把握できる全ての外国人のうち、海水に浴したり、泳いだりした記録のみられる日記、回顧録と、彼ら来日外国人が行っていた行為を日本人が見聞した、あるいは体験したことを記した日記、懐古録である。なお、来日外国人が記した日記や回顧録が日本語に翻訳され出版されている図書については、その内容を翻訳資料に依拠するとともに、訳者によって大きく意訳されていると思われた箇所については、原書にあたり解釈を試みた。第2に、本章で取り上げた著者について知ることのできる資料、およびこの時代の社会的背景を知ることのできる資料である。

第4章で取り扱う資料は、日本人医学者によって1868(明治元)年から1887(明治20)年の期間に発表、刊行された、海水浴と海水浴場に関する現在入手できる全ての論説の原書を使用する。加えて、主資料の著者、編者について知ることのできる日記や回顧録、その他伝記、研究資料を使用する。

第1章 平安時代から明治時代初期における大野の潮湯治と潮湯治場

本章では、いままで単体として数点の史実しか取り上げられることのなかった、大野における潮湯治と潮湯治場を事例として取り上げ、大野の潮湯治と潮湯治場の歴史の全体像を把握し、大野に海水浴の概念が伝播してくるまでの歴史を明らかにすることを目的とした。

平安時代から室町時代にかけての行動様式について、現存するこの時代の史料数が限られていたという点は課題として挙げられるが、この期の行動様式は〈湯浴み〉と呼ばれており、大野の海水が、現代の水治療に分類される疾病治療に有効であることが発見されている。加えてこの情報は諸方に伝播され、大野外からの受容者を獲得している。湯浴みの方法としては、大野の海中に直接身を浸し浴す、あるいは大野の海水を汲み沸かし浴す行為が存在していたと考えられた。

江戸時代初期の大野は、病氣治癒を目的として、社会のある一定の階層に属する者に支持されていた。

江戸時代中期の大野について、海水を自宅に持ち帰り沸かし浴すといった、より能率的な行動様式が発明され受容されていた。また、薬湯としての効能を有することが紹介されており、これまでの病氣治癒を目的とした受容に加えて、今日の温泉入浴に近い形態としても受容されていた。

江戸時代後期になると、大野は〈大野の潮湯治〉として広く諸方に知れ渡り、名所化し、観光目的としても

受容されていた。また、各々が自由気ままに受容可能な社会的背景が成立している。このことから、この期の大野の潮湯治は、多様な行動様式が成立した時期であると考えられた。

なお、江戸時代初期から後期にかけて、この期の手がかりを知る資料の中に「塩湯」、「潮湯」、「潮湯治」、「汐湯治」といった語彙が出現する。この語彙の名辞について、大野の海水を〈しほ（お）ゆ〉、大野の海中に身を浸し浴したり、海水を沸かし浴す行為の総体として〈しほ（お）とうじ〉と称していたと考えられた。

大野における1881（明治14）年から1882（明治15）年の海水浴と海水浴場の伝播について、後藤新平や長与専斎、國貞廉平による働きがけが、重要な役割を果たしたと考えられる。彼らによって推し進められた海水浴とは、既存の大野潮湯治を、更に西欧の医学的見地から修正、補うかたちで体系化した概念であった。また海水浴場とは、この海水浴療法を実施する環境、すなわち場を示し、海水浴場として整備しようと試みた県下最初の事例が大野であった。

第2章 江戸時代後期から明治時代初期における海水浴の伝播

一 西洋医学書および医学教育の内容にみられる海水浴 一

本章では、来日外国人医師によって行われた医学教育の講義記録とその内容、および輸入医学書とその翻訳書の内容に着目し、江戸時代後期における、西洋からの医学的知識を介することによって我が国に持ち込まれた、海水浴概念伝播期の様相を明らかにすることを目的とした。

江戸時代後期の特徴の1つとして、西欧諸国の中でオランダだけが通商を幕府から許されていたことが挙げられる。この時代の我が国は、長崎出島に輸入されたオランダ語の書物や、オランダ船がもたらした様々な文物、来日したオランダ人を介して、オランダ語の習得や語学研究、医学などの自然科学、西洋史、外国事情などの人文科学、測量術や砲術等の諸技術を受容し始める。

〈海水浴〉の名称が伝播してきた経路の1つとして、オランダ医学に基づく医学教育が挙げられる。我が国における最初の伝播は、オランダ軍医として来日したシーボルト（1796-1866）に因るものと考えられた。その時期は、シーボルトが在日していた1823（文政6）年から1828（文政11）年の期間中である。彼の医学教育のなかに、〈海〉、〈水〉、〈浴み〉を合わせた1熟語としての〈海水浴（zee water bad）〉の名称が使用されていた。そしてシーボルトの講義を受けていた蘭医学者が、海水浴の名称を最初に知り得た日本人であったと考えられた。彼ら蘭医学者が記した講義ノートにみられた〈海水浴〉とは、病氣治療を目的とした治療法の1つで、関節屈伸不妨、半身不遂、小児疥癬の3種に対し、海水浴の処方がみられた。海水浴の方法としては、日に2、3度の浴みを行うといった実施頻度が伝えられている。また、海水浴とは海水に直接身を浸し浴す行為を示すものであって、浴湯に浸かる行為とは異なるものとして捉えられていた。

続いてシーボルトの帰国後、1857（安政4）年から1862（文久2）年まで在日したポンペ（1829-1908）による医学教育のなかに、病氣治療を目的とした海水浴に関する口述と、実際に日本人に海水浴を処方した事例がみられた。ポンペが示した海水浴とは、前者同様に病氣治療を目的とし、海水に直接身を浸し浴す行為であったが、新たに波のある海水に浸かる内容がみられた。

第2の伝播経路として、輸入されたオランダ医学書とその翻訳書に因ることが挙げられる。江戸時代後期に輸入され翻訳された医学書のうち〈海水浴〉の記載がみられた図書は、林洞海（1813-1895）によって訳述された『窓篤児薬性論』（林、1856）と、緒方洪庵（1810-1863）によって訳述された『扶氏経験遺訓』（緒方、1857）の2書であった。『窓篤児薬性論』の刊行は1856（安政3）年であるが、1840（天保11）年には訳し終えており、この未脱稿訳書は広く出回っていた。一方の『扶氏経験遺訓』の刊行は1857（安政4）年であるが、1838（天保9）年に輸入されて以降1842（天保13）年の訳稿完成までの間に、門下生によって筆写され読まれていた。したがって、1838（天保9）年から1840（天保11）年頃には既に、〈海水浴〉について知られていたと考えられる。海水浴の内容については『窓篤児薬性論』に詳述されていた。いずれの書も、海水

浴は病氣治療を目的とする治療法の1つで、海中に直接身を浸し浴す（海水冷浴）と、海水を温めて入浴する（海水温浴）の2法が紹介されていた。海水浴法のうち海水冷浴の適応症として、『窠篤児薬性論』には肺病、神経痛、癩癩、子宮病、頭痛、舞蹈病、発熱、麻痺、心気症、リウマチ、痛風に効果があることが示され、『扶氏経験遺訓』には肺病と痛風の2疾患が挙げられていた。浴法についての解説は、『扶氏経験遺訓』には記載がなく、『窠篤児薬性論』に1日1回、初回1、2分から少しずつ浴み時間を長くしていくという方法や、海水浴を実施するには南の海浜が良いという海水浴適地の指定が記されていた。

第3章 江戸時代後期から明治時代初期における海水浴の伝播 一来日外国人による海水浴一

本章では、江戸時代後期から明治時代初期にかけて来日した外国人が残した日記等から、彼らがいつ、どこで、どのような目的で海水浴を行ったのか、あるいは見たのかについて、外国人の行為を見分、あるいは一緒に経験した日本人の内容も含めて明らかにした。

18世紀中頃のイギリスで発祥したと言われる海水浴は、その後大陸の海岸伝いに浸透していき、19世紀中葉頃にかけて海岸保養の大衆化が広まり、病氣治療を目的とした海水浴のほか、海浜療養としての海水浴、リフレッシュや遊戯を目的とした海水浴が受容されている。19世紀中葉の我が国は、鎖国の時代から開国へと転じ、欧米の文化が流入してくる時代に当たる。1858（安政5）年に締結された安政の五カ国条約には、来港する外国人が外国人居留地から外出して自由に活動できる範囲についての規定が設けられていた。こうした背景のなか、来日した外国人が日本国内の旅行を目的として、あるいは学術研究を目的として日本各地に赴いた際、海水浴をした記録が残されていた。

植物採集の目的で日本を訪れていたイギリスの園芸学者ロバート・フォーチュン（1812-1880）が、1861（文久元）年7月に、金沢（横浜市金沢区）を探勝した際、海浜に浴した記録がみられた（フォーチュン、1997；Fortune, 1863）。彼の行った行為とは、自身のリフレッシュを目的としたもので、現代の海水浴にもみられる形態であった。なお、江戸時代後期に日本を訪れた外国人が残した記録のうち、海水浴と考えられる文面が記されている日記、回顧録は、管見の限りこの資料が最古のものであると思われる。

明治時代初期のうち、1868（明治元）年から1877（明治10）年までの年代期に、海水浴と考えられる文面が記されている日記、回顧録は、管見の限り5件の記録が確認された。1871年9月（明治4年8月）に、北海道の白老で海水に浴し泳いだ記録（ロングフェロー、2004；Longfellow, 1998）。1871年8月（明治4年7月）に、日本人女性が何らかの疾病の治療を目的とした海水浴に来ていた記録（ヒューブナー、1988；Hübner, 1873）。1872年8月（明治5年7月）に、日本の暑夏の避暑地を探す目的で片瀬（神奈川県藤沢市）を訪れ、夕食前に海水浴をした記録（ブスケ、1977；Bousquet, 1877）。1876（明治9）年8月に、リフレッシュや海浜における水泳、暑気払いを目的として海水浴をした記録（ギメ、1977；Guimet, 1878）。1877（明治10）年8月に、学術調査として赴いていた江の島（神奈川県藤沢市）で海水浴をした記録（松村、1926）である。この期の来日外国人による海水浴の特徴として、病氣治療を目的とした海水浴と、リフレッシュや暑気払いを目的とした海水浴の両概念が受容されていた。

明治時代初期のうち、1878（明治11）年から1886（明治20）年までの年代期に、海水浴の文面が記されている日記、回顧録は、管見の限り4件が該当した。1879（明治12）年の、海水浴場を開設するために現地調査を行った記録と、知り合いの日本人の子どもを海水浴に連れて行った記録（ベルツ、2008；Bälz, 1930）。1881（明治14）年刊行の、日本の観光ガイドブックにみられる海水浴地の紹介（アーネスト・サトウ、2008）。1887（明治20）年に外国人女性の海水浴をみた日本人の記録（柳田、1998）である。この期の特徴として、日本の為政者が国内に海水浴場を設置しようと動き始めていること。来日外国人の間では、日本の海水浴地が広く知られるようになってきていること。海水浴を体験したことのない日本人にとっては、来日外国人が行う海水浴が全く新しい概念として目に映っていたこと等を挙げることができる。

第4章 明治時代初期の海水浴論

本章では、1887（明治20）年までに発表、刊行された、現在入手し得る全ての海水浴と海水浴場に関する資料を対象として、明治時代初期から中期にかけて論じられた海水浴と海水浴場に関する各説が、どのような社会的背景のなかで、どのような目的をもって執筆に至ったのか、新たな知見を加え、明らかにした。

1868（明治元）年から1887（明治20）年の間に発表または刊行された、海水の効用や浴法等について説いた論説は、管見の限り1884（明治7）年の緒方惟準・村瀬讓『海水浴』、1885（明治8）年の緒方惟準・村瀬讓『海水浴説』、1879（明治12）年の緒方惟準『海水浴ノ説』、1881（明治14）年の内務省衛生局『海水浴説』、1882（明治15）年の後藤新平『海水効用論 附海浜療法』、1883（明治16）年の栗本東明『日本海水浴説』、1883（明治16）年の高木兼寛『浴法論』、1886（明治19）年の松本順『海水浴法概説』の8資料であった。

各論説の発表または刊行に至る背景、および発表または刊行の目的について、各論者・编者別にみると次のとおりであった。緒方惟準は、日本において海水浴による効能・効果について知るものが少なく、諸病を療養し健康を保護することを目的とし、国内に海水浴の周知と海水浴場の開設を課題としていた。内務省衛生局は、日本に病氣治療や療養、衛生、健康のための海水浴施設が整備されておらず、国民に海水浴による医治効果を周知させ、且つ海水浴を習慣にさせることを目的とし、国内に海水浴場を開設することを課題としていた。後藤新平は、大野（愛知県常滑市）で受容されている潮湯治にみられる古くからの因習の弊害を取り除き、且つ愛知県下の海水浴場改良の参考にすることを目的としていた。栗本東明は、日本において海水浴法に関する認知は未だなく、海水浴場施設も整備されていないことから、国民の健康を図り、国民の疾病苦を救うことを目的とし、海水浴場を整備し海水浴法を広く知らしめることを課題としていた。高木兼寛は、国民衛生の観点から海水浴法が必要であることを説き、海水浴法について一般に知らしめることを目的としていたと考えられた。松本順は、海水浴は病氣治療に加えて健康の増進にも効果があることを説いており、海水浴の適応症に関する項目の記述が詳細であること、および自伝にみられた海水浴場設置に対する熱意などから、海水浴による病氣治療や健康増進を目的とし、海水浴場の開設を課題としていたと考えられた。

1868（明治元）年から1887（明治20）年の間に発表または刊行された8篇の論説のなかで特に注目されたことの1つに、松本順『海水浴法概説』が挙げられる。西欧の医学的見地から論じられる『海水浴法概説』のなかにあつて、「快爽」な感覚が医療的にも良い結果を招くという実体験をもとに語られていること、「大愉快」「快爽」が病者に限らず健全な者にも良いとする論説は、他7篇の各論説にはみられなかったものであった。

終章

第1節 本研究のまとめ

海水浴に関する情報を最初に我が国にもたらしたのは、西欧から輸入されたオランダ医学書とその翻訳書、或いはシーボルトやポンペによるオランダ医学教育を学んでいた蘭学者、医学者たちからであったと考えられた。この経路から伝播された海水浴は病氣治療を目的としており、言い換えれば、海水浴の概念は西欧の医学的認識を介することによって我が国に持ち込まれた。しかし、同じ病氣治療や療養を目的とした海中への浴み行為は、江戸時代後期の〈大野の潮湯治〉にもみられた。例えば、海水浴の適応症として、シーボルト講義ノート（戸塚、1983；中村、1990）には、関節屈伸不妨、半身不遂、小児疥癬が挙げられていた。『窠篤児薬性論』（林、1856）においては、肺病、神経痛、癩癩、子宮病、頭痛、舞踏病、発熱、麻痺、心気症、リウマチ、痛風が挙げられ、『扶氏経験遺訓』（緒方、1857）には、肺病、痛風に効果があることが記されていた。他方、この時代の大野では、『尾張名所図会』（林、1984）の「終日幾度も出没する事、五日、七日する時は、あらゆる

る諸病を治す」や、『郷中知多栗毛』(南 瓜、1843 ; 岸野、1999) にみられる潰瘍、腫物、疥癬、淋病、心気症、「手足の廻りあしき類ひ、そのほか万病に効有る」等、輸入医学書等に類似する疾病に効果があることが認知されていた。加えて、海水浴の方法について、シーボルト講義ノートには「海水浴ヲ毎日二三浴セシム」といった頻度についての解説がみられ、『猿蓑児薬性論』には「温浴ト冷浴トヲ選ムベシ」といった浴法の種類が挙げられていた。他方、この時代の大野では、日に複数回海水に浴す頻度が認知されていた。また、海水温浴と海水冷浴を適宜使い分ける方法は、江戸時代中期頃の大野で既に確立していた。したがって〈大野の潮湯治〉には、病気治療を目的とする海水浴の概念が我が国に伝播する以前から、海水浴と同義の概念を有する行動様式が成立していたと考えられる。

次に、我が国における前者と異なる海水浴の伝播は、江戸時代後期から明治時代にかけて来日した外国人による経路からもみられた。彼らが行った海中への浴み行為とは、病気治療・療養を目的とするほかにも、単に暑いときに海で水浴びをしたり、心身のリフレッシュを目的に海で泳いだりしており、現代の海水浴の行動様式に類似する、或いは同等な行為であった。他方、来日外国人が受容していたレジャー的な行動様式に類似する行為は、〈大野の潮湯治〉にもみられた。具体的には、『郷中知多栗毛』にみられた〈立ち泳ぎ〉や〈仰向き泳ぎ〉の行為、浴中に水しぶきをあげ魚を追いかけ楽しむ描写等、開放的な感覚が享受されており、江戸時代後期の〈大野の潮湯治〉にはレジャー的な要素が含まれていた。したがって、〈大野の潮湯治〉には、病気治療を目的とする概念以外にも、レジャー的な海水浴が伝播する以前から、類似の概念を有する行動様式が成立していたと考えられる。なお、江戸時代後期における大野は〈大野の潮湯治〉として名所化し、諸方に知られ、観光目的の人々も訪れていた。以上のことから考察すると〈大野の潮湯治〉は、病気治療や療養を目的とした一部の特定される者の受容から、広く大野を訪れた人々によって受容されるようになり、レジャー的な要素をも併せ持った広い概念を有する行動様式に変化してきたのではないかと考えられた。

明治時代初期に来日した外国人による海水浴のうち、ギメとレガメーが 1876 (明治 9) 年に片瀬の海岸で海水浴を行った際、「思うに、このような不都合があるから (くらげに刺されること)、日本人は海で泳がないのだ」と記していた。他方、この時代の大野でも類似する行為がみられた。〈大野の潮湯治〉について、小口 (2002) は「日本では、身を湯 (温泉) に浸す湯治は入浴療法としてすでに各地で行われていたが、海中に身を浸す潮湯治は、この大野だけで行われる特異な習俗であった」と述べている。また、林 (1942) は「就中尾州の大野浜では昔から暑中近在から海水に浴しに来る習慣があつて、大野の潮湯治と称して名高く、尾張名所図会にもその図が出て居る。(中略) かくの如く海水浴ということは古来我邦に全然存在しなかつたのではないが、普遍的なものではなく只一局部にのみ行はるゝに過ぎなかつた。」と述べている。本研究で得られた結果と先 2 者の見解を踏まえたうえで、江戸時代後期から明治時代初期にかけての〈大野の潮湯治〉を考察すると、次のようなことを導き出すことができる。古来我が国では、〈潮浴み〉や〈潮湯浴み〉、〈塩浴〉、〈潮風呂〉、〈海潮浴〉や〈潮水浴〉等、海水に浴すことが各地で行われていたが、年間を通じて海中に身を浸したり海水を沸かして浴す〈潮湯治〉が受容され、病気治療を目的とするほか、レジャー的な感覚としても受容されていた地域は大野だけであり、〈大野の潮湯治〉は大野特有の行動様式であったと考えられた。

明治時代になると、日本人医学者によって海水の効用や海水浴法について説かれ始める。彼ら日本人医学者や為政者が推し進めようとしていた海水浴とは、病気治療や療養、健康、国民衛生を目的とし、西洋の医学的認識を介することによって我が国に導入しようとしたものであった。しかし、既に上述のとおり、〈大野の潮湯治〉には病気治療を目的とした行動様式が存在していた。また寺田寅彦 (1935) が経験した 1881 (明治 14) 年の潮湯治療養にみられるように、大野では「明治十四年にたとえ名前は『塩湯治』でも、すでに事実上の海水浴が保健の一法として広く民間に行われていた」ことから、〈大野の潮湯治〉は、病気治療に加えて療養や保健の領域としての役割をも果たしていた。加えて、寺田が経験した〈大野の潮湯治〉と、日本人医学者や為政者が推し進めようとしていた海水浴は、同義であると考えられた。

このように、江戸時代後期から明治時代初期にかけて伝播した海水浴の概念は、既に〈大野の潮湯治〉に存在していた。しかし、後藤新平 (1882) が「従来族間ノ因習ニ因テ海水浴法ヲ誤ル者尠カラス」と論じている

ように、彼らが説く西洋医学のまなざしからは、『尾張名所図会』の絵図にみられるような、岩上に腹ばいになって寝そべる姿であったり、温泉に入るような感覚で波打ち際で海水に浴す姿、『郷中知多栗毛』にみられる「勇気のわる達ほどぶんどぶんと立ちおよぎ」や「石をかゝへて仰向けに寝ている」姿が、「理解シ難キ所アリ」と奇異に捉えられていた。これは、〈大野の潮湯治〉のなかに、病気治療や療養、保健の一領域としての海水浴に加えて、レジャー的な海水浴の概念をも含まれた、大野固有の行動様式が成立していたことに因ると考えられた。

このほか、この当時冷たい海水に浸かる習慣を持たなかった日本人にとって、海水浴を行うことで感じる腹部の冷たさが、〈不快〉なものとして捉えられていたと考えられた。これは、松本（1886）が終日飽きることなく遊泳する漁師の子どもたちが浜辺の熱い砂上にうつ伏せになり、胸や腹を温めている姿をみて「必ス害アラコト」「理ナキヲ疑フ」等と記していたことから推察された。しかし松本は、漁師の子どもたちにならって砂上にうつ伏せになることを試みると、「快然」の感覚が得られ、たちまちにして「大愉快」であったと記しており、海中から上がり熱砂に腹ばいになることで〈不快〉な感覚を「大愉快」「快爽」に変えることを発見し、治験を得たうえで、西洋医学の見地から押し勧める海水浴法のなかに、新たな新法を加え論じている。さらに、林若樹（1942）が「海水を出て此熱砂に浴する爽快さとの特色は他の追随を容さない」「砂は熱浴に適し、佛へば少しも身体に附著せぬ特徴を有って居た」と述べていたように、松本が推し進めた海水浴地は、西欧の医学的認識のほかにも、体験から得られた医治効果や健康増進の効果を合わせ、適地を選択していたと考えられた。他方、この行為もまた〈大野の潮湯治〉のなかにはみられた。しかし、〈大野の潮湯治〉と松本が実体験から得た「快然」の感覚との関連性や、お互いがどう影響しあったのかについては解明に至ることができなかった。

第2節 今後の課題

本研究で明らかにできなかった課題が2点挙げられる。

1点目は、江戸時代後期から明治時代初期、具体的には1845（弘化2）年から1880（明治13）年までの35年間の、大野に関する資料を探し出すことができなかった。この年代期の特徴として、大野では浴み、泳ぎといった行動様式の多様化がみられる。他方、この年代期は我が国に海水浴が伝播してくる時期に該当する。〈大野の潮湯治〉の発展と海水浴概念伝播との関係を解き明かすためには、更なる研究の蓄積が必要である。

2点目は、第2章および第4章の病気治療や療養、保健領域としての海水浴の伝播（松本順を除く）と、第4章の松本順による〈レジャー的要素〉が加わった海水浴の展開について、内容把握の相違の背景や理由を実証することができなかった。明治時代中期以降は海水浴と海水浴場が行楽やレジャー的な要素をもって発展していく時期であり、海水浴の概念が全国各地に伝播し、海水浴場施設が急速に増加している。海水浴のレジャー的な要素が、後の大衆化される1要因であると考えられるが、今後の更なる研究の蓄積が必要である。合わせて今後の課題としたい。

IV 本論文の主要引用参考文献

アーネスト・サトウ編：庄田元男訳、明治日本旅行案内：東京近郊編、平凡社、2008。

上田卓爾、日本の海水浴の始まりについて、静岡英和学院大学紀要、第4号、2006、pp.81-100。

上田卓爾、日本の「海水浴の大衆化」について：岡山県の海水浴の歴史を例として、第22回日本観光研究学会学術論文集、2007、pp.101-104。

上田卓爾、緒方惟準の「海水浴ノ説」について、医譚、復刊第90号（通巻第107号）、2009、pp.88(5876)-93(5881)。

- 緒方惟準・村瀬讓、海水浴説、医事雑誌、第 29 号、1875、pp.7(裏)-11(表)。
- 緒方惟準、海水浴ノ説、刀圭雑誌、第 11 号、1879a、pp.1-4。
- 緒方惟準、海水浴ノ説 (前号ノ続)、刀圭雑誌、第 12 号、1879b、pp.1-3。
- 緒方洪庵、扶氏経験遺訓、1857。
- 小口千明、日本における海水浴の受容と明治期の海水浴、人文地理、第 37 卷第 3 号、1985、pp.23-37。
- 小口千明、潮湯の偏在性に関する地理学的予察：日本における海水浴普及との関係から、城西人文研究、第 13 号、1986、pp.57-74。
- 小口千明、日本における伝統的蒸気浴・熱気浴の具体像 (前編)：概念規定の諸問題と近畿以東の分布について、城西大学大学院研究年報 (人文・社会科学編)、第 4 号、1988、pp.45-57。
- 小口千明、日本における伝統的蒸気浴・熱気浴の具体像 (後編)：中国地方以西の分布について、城西大学大学院研究年報 (人文・社会科学編)、第 16 号、1992、pp.1-27。
- 小口千明、療養から行楽型海水浴への変容と各地の海水浴場、地方史研究、第 48 卷第 5 号、1998、pp.9-14。
- 小口千明、日本人の相対的環境観：「好まれない空間」の歴史地理学、古今書院、2002。
- 小口千明、日本における海水浴の受容と海岸観光地の変化 (小長谷有紀ほか編、アジアの歴史地理(3)：林野・草原・水域、朝倉書店、2007、pp.249-260)。
- 岸野俊彦編、「膝栗毛」文芸と尾張藩社会、清文堂、1999。
- ギメ：青木啓輔訳、1876 ボンジュールかながわ、有隣堂、1977。
- 栗本東明、日本海水浴説、東京医事新誌、第 265 号、1883、pp.1-4。
- 栗本東明、日本海水浴説 (前号ノ続キ)、東京医事新誌、第 266 号、1883、pp.1-5。
- 栗本東明、日本海水浴説 (前号ノ続キ)、東京医事新誌、第 267 号、1883、pp.3-8。
- 栗本東明、日本海水浴説 (前号ノ続キ)、東京医事新誌、第 268 号、1883、pp.1-6。
- 栗本東明、日本海水浴説 (前号ノ続キ)、東京医事新誌、第 269 号、1883、pp.1-5。
- 國木孝治、明治期の巖島 (広島県) における海水浴に関する一考察、広島体育学研究、第 37 卷、2011、pp.18-25。
- 國木孝治、江戸時代後期における海水浴概念の伝播に関する研究：西洋医学書および医学教育の内容にみられる「海水浴」に着目して、スポーツ史研究、第 25 号、2012、pp.57-64。
- 公文通誌、海水浴、1874 年 8 月 9 日、3-4 面。
- 後藤新平、海水功用論 附海浜療法、成文社、1882 (岸野雄三編、近代体育文献集成、第 27 卷、日本図書センター、1983)。
- 畔柳昭雄、海水浴と日本人、中央公論新社、2010。
- 佐野重造編、大野町史、大野町役場、1929。
- 新藤和子、海水浴・潮湯・海水温浴と温泉の類似点と入浴文化の考察、温泉地域研究、第 11 号、2008、pp.21-26。
- 杉本つとむ、近代訳語を検証する(47)：海水浴・蘇吧 spa・清涼剤・酒石酸・舍利別・里没奈埜、国文学・解 釈と鑑賞、72 卷 7 号、2007、pp.228-237。
- 瀬崎圭二、夏目漱石『木屑録』の海水浴、名古屋短期大学研究紀要、第 45 号、2007、pp.300-312。
- 高木兼寛、浴法論、大日本私立衛生会雑誌、第 4 号、pp.4-11。
- 寺田寅彦、寺田寅彦全集、第十卷、岩波書店、1935。
- 戸塚武比呂、シーボルト処方録、日本醫史學雑誌、29 卷 4 号、1983、pp.316-339。
- 十代田朗・岡村憲之、新潟県における海水浴の発生と開発初期の海水浴場の空間構造に関する研究、日本建築学会北陸支部研究報告集、第 38 号、1995、pp.421-424。
- 常滑市教育委員会編、常滑の古文書：常滑市文化財調査報告書：第 6 集、常滑市教育委員会、1979。
- 富澤一弘・若林秀之、近代富山県における海水浴に関する研究、産業研究、第 41 卷第 2 号、2006、pp.43-63。
- 中山正樹、明治期における海水浴場の成立に関する一考察、地域研究、第 41 卷第 2 号、2001、pp.14-22。
- 中村昭、蘭方口伝ーシーボルト験方録、日本醫史學雑誌、36 卷 3 号、1990、pp.271-294。

- 長与専斎、松香私志（小川鼎三・酒井シヅ編、松本順自伝・長与専斎自伝、平凡社、1980、pp.101-214）。
- 内務省衛生局編、海水浴説、内務省衛生局雑誌、第 34 号、1881。
- 南瓜未成、郷中知多栗毛、書肆文泉堂、1843。
- 名古屋温故会編、名古屋温故會叢書(7)：安永本邦萬姓司記（卷之上）、名古屋温故會、1942。
- 名古屋市蓬左文庫編、名古屋叢書三編：尾藩世記（下）、名古屋市教育委員会、1987。
- 日本公衆衛生協会編、公衆衛生の発達：大日本私立衛生会雑誌抄、日本公衆衛生協会、1967。
- 野田惣太郎編、大野・新舞子・新須磨海水浴案内（修訂版）、亀崎印刷、1926。
- 林洞海訳、通俗窠篤児薬性論、1840。
- 林洞海訳、窠篤児薬性論、1856。
- 林英夫編、日本名所風俗図会 6：東海の巻、角川書店、1984（岡田文園・野口梅居撰・小田切春江画、尾張名所圖會、卷之六、1844）。
- 林若樹、集古隨筆、大東出版社、1942。
- ヒューブナー：市川慎一・松本雅弘訳、オーストリア外交官の明治維新：世界周遊記＜日本篇＞、新人物往来社、1988。
- 平野貞造、大野海水浴案内、三益社、1900。（平野家所蔵）
- フォーチュン：三宅馨訳、幕末日本探訪記：江戸と北京、講談社、1997。
- ブスケ：野田良之・久野桂一郎訳、ブスケ：日本見聞記 1：フランス人の見た明治初年の日本、みすず書房、1977。
- ベルツ：トクベルツ編・菅沼竜太郎訳、ベルツの日記（上）、岩波文庫、2008。
- ポンペ：沼田次郎・荒瀬進訳、ポンペ日本滞在記：日本における五年間、雄松堂書店、1968。
- 松本順、海水浴法概説、二神寛治、1886年。
- 松本順、蘭疇、窪田昌、1902（明治文化研究會編、明治文化全集、第 27 卷科學篇、第 2 版、日本評論社、1967、pp.464-512）。
- 村松任三、江の島滞在中のモールス博士、人類學雑誌、第 41 卷第 2 号、1926、pp.54-56。
- 宗田一、緒方惟準と海水浴説、医譚、復刊第 64 号（通巻第 81 号）、1993、pp.31(3817)-34(3820)。
- モース：石川欣一、日本その日その日（1）、平凡社、1970。
- 森口保、島根・海水浴事始め、島根県観光学会誌、第 12 号、1994、pp.45-53。
- 柳田国男：岡谷公二編、作家の自伝(61)：柳田国男：さゝやかなる昔（抄）／故郷七十年（抄）、日本図書センター、1998。
- 横井千秋、木綿苑家集（古屋市教育委員会編、名古屋叢書：文学編(2)、第 15 卷、名古屋市教育委員会、1962、pp.69-87）。
- ロングフェロー：山下久美子訳、ロングフェロー日本滞在記：明治初年 アメリカ青年の見たニッポン、平凡社、2004。
- 綿貫慶徳、明治後期から大正期における大阪毎日新聞社の浜寺海水浴場経営に関する史的考察：新聞販売ターゲットとしての新中間層に着目して、体育史研究、第 21 号、2004、pp.1-14。
- Bousquet, G., *Le Japon de nos jours et les échelles de l'extrême Orient: Ouvrage contenant trois carters*, Hachette, Paris, 1877.
- Bälz, E., *Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan: Tageücher, Briefe, Berichte herausgegeben von Toku Bälz*, Engelhorn's Nachf, Stuttgart, 1930.
- Fortune, R., *Yedo and Peking: a narrative of a journey to the capitals of Japan and China*, John Murray, London, 1863.
- Guimet, E. & Régamey, F., *Promenades Japonaises*, G. Charpentier, Paris, 1878.

- Hageman Jr., H.H., *Enchiridion medicum: Handleiding tot de geneeskundige praktijk: Erfmaking van eene vijftigjarige ondervinding, door C. W. Hufeland: naar de laatste vermeerderde en verbeterde Hoogduitsche uitgave vertaald* (2^e), H. D. Santbergen, Amsterdam, 1838.
- Hufeland, C.W., *Enchiridion medicum: oder Anleitung zur medizinischen Praxis: Vermächtniss einer fünfzigjährigen Erfahrung*, Jonas Verkagsbuchhandlung, Berlin, 1836.
- Hübner, A. F.V., *Promenade autour du monde 1871*: per M. le Baron de Hübner, 2nd edition, Libr. Hachette, Paris, 1873.
- Longfellow: Laidaw, C. W., *Charles Appleton Longfellow: twenty months in Japan 1871-1873*, Friends of the Longfellow House, Cambridge, 1998.
- Morse, E. S., *Japan day by day: 1877, 1878-79, 1882-83* Volume 1, Cherokee Pub. Co., Atlanta, 1990.
- Satow, E. M. & Hawes, A. G. S., *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan: being a guide to Tōkiō, Kiōto, Ōzaka, Hakodate, Nagasaki, and other cities, the most interesting parts of the main island, ascents of the principal mountains, descriptions of temples and historical notes and legends*, Murray, London, 1881.
- Water, J. A. van de, *Beknopt doch zooveel mogelijk volledig handboek voor de leer der geneesmiddelen (Materies medica)*. C. G. Sulpke, Amsterdam, 1834.